

# 歴史の街「松阪」の三つの顔 - 「城下町・宿場町・豪商の町」それぞれの関係性を探る -

## 三重県立松阪高等学校 郷土地理部

### 研究テーマ・松阪の概要

歴史の町「松阪」は、城下町・豪商の町・宿場町という3つの顔を持つ。それぞれの現在に残る遺構を調査するとともに、商業の繁栄を支えた松阪木綿の生産と販売の特徴を探究することで、3つの顔の関連性を明らかにしたい。松阪は1588年に蒲生氏郷が松阪城を築き城下町となる。その後、江戸時代になると、三重県は、津は幕府藩の、伊勢は神宮の支配を受けるなど、多くの藩の領地に分かれたが、松阪は紀州藩の領地となった。紀州藩は、伊勢国内に、松阪、白子、田丸の3領があり、これらは「紀州藩伊勢三領」と呼ばれた。特に松阪は和歌山と結ばれた街道の要所であり、さらに松阪城があるため、藩の出先機関が集中的に置かれた。また松阪は蒲生氏郷が商業を重視した町作りを行ない、商業が発展し三井家や小津家などの豪商が誕生した。更に、江戸時代になるとお伊勢参りが大流行し、松阪は伊勢に続く参宮街道と和歌山街道の二つの街道が通っていたため、松阪はお伊勢参りの旅人が行き交う街道沿いの宿場町としても栄えた。



### 研究手法

文献調査、フィールドワーク、聞き取り調査・インタビューなどの手法を用いる。

### 城下町・松阪の遺構

今も残る城下町の特徴に、街路が挙げられる。城の防衛機能としての役割を持つ城下町は、敵軍が攻めてきたときに大勢が一斉に進軍できないように、意図的に道をこぎり状やT字路のように複雑にした。このような街路は現代も残っている。さらに城下町は、仕事の効率や町人の支配のために、町を身分や職業別に区分していた。松阪でも、「魚町」、「職人町」などが挙げられ、そのような町名は現在も使われている。また、武家地と町人地を区分するために背割り下水が引かれており、この下水は今でも一部使われる。松阪城の堀は現在ほとんどが埋め立てられてしまったが、現在でも一部の水路にその痕跡を見ることができ、



G:旧参宮街道沿い(塚本町)に残る常夜燈



B:築城当初から現在まで名前が残る魚町



A:現在も残る複雑な街路(5月巡検時撮影)



C:武家地と町人地の間を流れる背割り下水(5月巡検時撮影)



D:松阪城下に残る堀跡

### 豪商の町・松阪

蒲生氏郷は経済的で平和な町づくりのために「町中掟」を定めて町人を保護して市市楽座を進め、自由な商売を保障した。さらに近江の日野や伊勢の大湊から有力な商人を誘致し商業の発展を図った。江戸時代になると松阪木綿が江戸で大流行し、有力な商人の多い松阪はより商業が発展した。また江戸時代の松阪は紀州藩の飛び地として統治され藩主が常駐しておらず、武士の数が少なかった。武士が頂点のピラミッド型支配構造が崩れた城下は権力者や武士に妨害されることなく商人は自由に商売ができた。そして、次第に商人の存在が大きくなり、三井家や小津家などを誕生させる豪商の町となった。さらに江戸だけでなく大阪や京都でも店を持つ商人も多く、これら三都市の文化や政治経済の最新情報が松阪にもたらされた。現在でも松阪には三井家や小津家の旧宅が残されており、豪商の町の面影が残されている。



E:本町通りに位置する旧小津邸。小津家は「江戸一の紙問屋」と呼ばれた豪商である。建物からは整った格式の高さがみられる。

### 宿場町・松阪

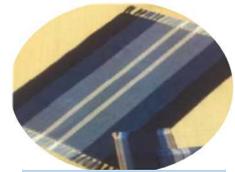
江戸時代にはお伊勢参りが大流行し、松阪は伊勢に続く参宮街道と和歌山街道沿いの宿場町としても栄える。参宮街道は町の北西から南東にかけて横断しており、和歌山街道は南西から北東にかけて横断している。全国各地から多くの人々が松阪に集まったのに比例して情報が多く入り、松阪は情報都市となり商業などに活かされた。現在でも市街地で参宮街道と和歌山街道、熊野街道それぞれの分岐点に2つの道標が残っており、夜道の安全のためや街道の道しるべのために建てられた常夜灯も街道沿いであられる。



F:参宮街道と和歌山街道の分岐点にある道標(5月巡検時撮影)

### 松阪商人の発展を支えた松阪木綿

江戸時代、伊勢国で作られた木綿の中でも、特に松阪で生産された木綿を松阪木綿と呼んでいた。江戸では、伊勢国で生産されたものを一括りに伊勢木綿と呼ぶことが多かった。伊勢木綿の中でも、松阪木綿の松阪織は特に人気で、ブランド的価値があった。今回、松阪で生産された、松阪織のある木綿のことを「松阪木綿」と定義する。また、松阪商人も伊勢商人の中で特に松阪出身の者が松阪商人と、地元で呼ばれていた。今回の発表では、その中でも特に、松阪木綿によって財を成した松阪商人を「松阪商人」と定義する。



江戸で人気を博した松阪織



江戸の三都と松阪

### 松阪商人の市場

江戸時代、三大都市の一つとして栄えた京都では、松阪商人は、商売をばば行わず、仕入れを中心に行っていた。江戸には生産という機能がなく、経済状態としては消費が中心だったのに対して、京都では、良質なものが生産され、また、全国から集められるという特長があった。京都の最大の特長として、公家の割合が他と比べて大きいということがある。このことから、公家に奉公している産民も他より多かったとされている。これらのことから、そもそも京都での商売は、あまり利益が出ないと考えられており、あまり松阪木綿を売ってはいなかった。

また、最も松阪木綿が流通していた江戸では、庶民を中心に松阪木綿が広がっていた。松阪木綿が本格的に流行し始めたのが1790年代とされており、その時には、年間65万反程度の松阪木綿が流通していた。この数字は、江戸に住んでいる半分以上の人が松阪木綿を身に付けていた計算になる。実際は、綿花の栽培ができなかった東北地方に流通させていた。また、江戸時代日本では、松阪木綿のほか、「河内木綿」と呼ばれる大阪の木綿が広く流通していた。この木綿には、糸が太く、丈夫であるが色合いが悪いという特徴があった。一方、松阪木綿は、糸が細く丈夫でない代わりに、松阪織という特長が施されていた。大阪では、見た目よりも丈夫で長持ちの「実」がとれたため、松阪木綿はあまり売れなかった。しかし、江戸では、丈夫よりも「粋」であることが重要視され、河内木綿と比べ、圧倒的な差をつけ、松阪木綿は江戸で飛ぶように売れたのである。

### 今につながる商人同士の連携

江戸時代、松阪商人同士での交流・連携が盛んだったと言われている。松阪商人は、江戸藩を構えるにあたって、商人同士で様々な組織を作った。同業者での結びつきは、特に強固なものであったと考えられており、「伊勢木綿南組木綿買次問屋仲間」(通称「松阪木綿買次問屋仲間」)や「伊勢北組木綿買次問屋仲間」など、様々な商業仲間の組織が作られた。松阪木綿の需要が減り、次々と商人たちが淘汰されていった中、その組織内で助け合いがされていたことも明らかになっている。



江戸大馬場町に軒を並べる松阪商人(豪商)の店舗

### 木綿の歴史

戦国時代には、木綿は高級品とされており、大名や公家中心に流通しており、庶民には手に入るものではなかった。とりわけ大名には愛用されており、兵衣・陣羽織・陣幕・馬衣・鉄道用火筒等の軍需品として用いられた。当時は、主に朝鮮半島や中国から輸入したものが流通しており、それらは唐木綿や朝鮮木綿と呼ばれていた。しかし、日本での需要が高まり過ぎたことから、朝鮮国での内需用が脅かされ、日本への木綿輸出が抑制されていった。また、中国が勘合貿易以外の私的な貿易の禁止体制を強めていったことで、日本への木綿輸出は減少の一途を辿った。そういったことから、日本では16世紀初め頃から、東海エリアや近畿エリアで木綿栽培が始まる。中でも伊勢国付近では、盛んに栽培されるようになった。

### 松阪木綿のルーツ

松阪木綿を生産するにあたって、高度な紡績・染色技術・と木綿栽培が可能であることが、必要である。双方の条件を満たすことができたのは、松阪の立地条件が良かったということが挙げられる。伊勢国内には神宮があり、松阪では古くから、神宮に奉納するための織物を生産していた。そのため、高度な紡績・染色技術を持っていたのである。



伊勢神宮に関連する徳島神社(松阪市)

**考察** 蒲生氏郷の作った、松阪城下町は商業を重視し、日野や伊勢の大湊だから、有力な商人を手配し、城下で自由商売を認めた。こうした町づくりは、商業の発展に大きく貢献したと考えられる。一方で、道を複雑にし、寺を多く配置して、城の防衛機能としての役割を持たせるなど、城下町には軍事面での特徴もあった。江戸時代になると松阪は、紀州藩の飛び地となり、藩主が常駐せず、城下には武士が少なかった。武士を頂点とするピラミッド型の支配構造が崩れた城下町では、武士の目に気にせず商業ができ、商人の町として大きく発展した。この状況は、城主の居なかった大阪城下町と近いものがあったのではないかと推測される。また、和歌山街道と伊勢街道の街道沿いである松阪城下は、伊勢参りに訪れる人々の宿場町でもあった。全国各地の人々が参拝に来るため、多くの情報が松阪に集まり、情報の中心地となったことも、松阪が豪商の町として栄えることができた要因として推測される。情報交流を重点に置き、常に新しい商法を研究し続けることが、松阪商人が、松阪城下町の経済発展に貢献し、現在の経済にも影響を与えることができた要因ではないかと推測する。地元の産物を活かし、時代の流れを多角的な視野で把握するために、常に情報を大切にすることは、今の商業に通じるのではないだろうか。

謝辞 本居富長記念館前館長・吉田悦之様、松阪歴史文化管理理事長・門陣代司様、中日新聞社・望月記者をはじめ、多数の方々にご貴重なお話を伺え感謝いたします。改めて感謝いたします。